

ディラン・トマスの「三芒の星」

伊原 五郎*

クリスチャンではなかったが、聖書に題材を求めて多くの詩をうたいあげたウィリアム・ブレイクは、聖書は詩の霊泉である、といった。ディラン・トマスもまたプロテスタントでもカトリック教徒でもなかったが、聖句や聖書の記事を暗示するイメージを豊かに使って詩を作った。聖書はトマスにとって何であったのか、トマスは聖書に何を見出したのか、本論ではそうしたトマスと聖書の関係を「18の詩」の中から「初めに」をとりあげて考察してみたい。

はじめに

トマスの詩「初めに」は1933年に作られ、翌34年に改作して発表された。時にトマス弱冠19歳。旧約聖書の「創世記」と新約聖書の「ヨハネによる福音書」の冒頭を擬したトマスのうたう創世記である。「創世記」第一章は「はじめに神は天と地とを創造された。」から始まり、続いて、神の命ずる言葉により、第一日に光、二日に天、三日に地、四日に星、五日に生き物、六日には人を作ったことが語られている。一方「ヨハネによる福音書」は冒頭「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」で始まり、以下すべてのものが言によって出来たことが簡潔に述べられている。天地創造を伝えるこれら聖書の語り口にたいして、トマスの「初めに」は次の如く6行5連の詩からなっている。

IN THE BEGINNING

IN the beginning was the three-pointed star,
One smile of light across the empty face;
One bough of bone across the rooting air,
The substance forked that marrowed the first sun;
And, burning ciphers on the round of space,
Heaven and hell mixed as they spun.

In the beginning was the pale signature,
Three-syllabled and starry as the smile;

And after came the imprints on the water,
 Stamp of the minted face upon the moon;
 The blood that touched the crosstree and the grail
 Touched the first cloud and left a sign.

In the beginning was the mounting fire
 That set alight the weathers from a spark,
 A three-eyed, red-eyed spark, blunt as a flower;
 Life rose and spouted from the rolling seas,
 Burst in the roots, pumped from the earth and rock
 The secret oils that drive the grass.

In the beginning was the word, the word
 That from the solid bases of the light
 Abstracted all the letters of the void;
 And from the cloudy bases of the breath
 The word flowed up, translating to the heart
 First characters of birth and death.

In the beginning was the secret brain.
 The brain was celled and soldered in the thought
 Before the pitch was forking to a sun;
 Before the veins were shaking in their sieve.
 Blood shot and scattered to the winds of light
 The ribbed original of love¹.

初めに三芒の星あり
 空なる顔を横切る光の微笑
 根づける大気を横切る骨の枝
 原初の太陽の活力となりし叉状の物質
 円空に燃上がりたる暗号
 回転しつつ混じりあいし天国と地獄

初めにうっすらと署名あり
 微笑よろしき三音節の星さながらに
 はたまた後につづける水面の痕跡
 月に鑄造されし顔の刻印
 十字架と聖盤にふれたる血の
 原初の雲にふれ記号をば残せり

初めに噴き上がれる炎あり
 火花 天候に燃え移る
 花の如くそっけなく 三つ目に赤い目の火花
 うねる海より立上がり 噴き出せる生命の
 根に割り入りて 大地と岩より吸い上げし
 草をば駆る神秘的な油

初めに言葉あり
 堅固な光の基盤より
 すべて 空白の言葉をば引き出せり
 はたまた息に曇れる土台より
 言葉の流れいでて 心に刻むは
 生と死の 最初の文字

初めに謎の脳あり
 瀝青の 太陽に向かい分岐する前
 脳は細胞より成りて思想にハンダづけされり
 静脈の ふるいにかかりて揺れ動きし前
 血噴きいでて光の風目指すや
 愛の肋骨の原型をば撒き散らしたり

トマスの初期における作詩の特徴は、自らの内部に破壊的要素をもったイメージの（響きの調子を含めた）分裂と融合の発展的連続をはかることにあった。このことは、一つのものが一つの語で表されるのではなく、二つのものが同時に一つの語で表されたり、四つのものが二つの語で表現されたり、六つのものが一語で表される、といった風にイメージが展開されていくことなのである。従って、かかる方法がもたらすイメージの錯綜と複雑さは詩を味わうというよりも意味を理解しようとする時、しばしばわれわれを絶望させる。そして「初めに」においてもそれは例外ではないことを先ず断っておかなければならない。

1

「創世記」も「ヨハネによる福音書」も書き出しは「初めに」であるが、聖書解釈者はこれら二つの「初めに」の意味を区別する。前者は「続いている時間の第一の部分としての「初めに」であり、後者は「時間に関係せず、すべての時の前、すべての世の前に」の「初めに」である。この時間に関しての異なる概念は、(天の秩序)にしたがって時が形成される前の、混沌とした、ある意味での時間を持たない世界と、コスモス(秩序ある)世界の時間と考えたプラトンの宇宙論にみられる区別に類する。ではトマスの詩にみられる「初めに」はいかに理解すべきか。この点に言及したトマス研究者、クラーク・エメリィ²は「新しい信仰とか人生とか詩とか…といった、ずっとスケールの小さな何かの始まりのメタファーとして創世のテーマを使用している詩人ではあるまいか?そして、この問いにたいする答えは、誰が、何がその創造を行うかの決定がなされてはじめて出

る…」と、述べている。しかし、エメリイは神話が論理的解釈を拒否するのと同じくこの詩も論理的解釈を拒否するものとして、結局この詩の「意味を明らかにするいかなる努力も徒労」であることを認めている。トマス研究者で〔初めに〕という文頭の語句を特にとりあげている例を他には知らないが、わたしのこの詩へのアプローチはエメリイ同様〔初めに〕への疑問からはじまったのである。そして、確かにこの〔初めに〕は、エメリイも指摘したごとく上述の時間論の問題ではなく「何が…を…する」が問われる問題、つまりこの詩の主題は何かという問題なのである。

2

「初めに三芒の星あり」という冒頭の行に見られる三の数字がこの詩には三度出てくる。二連の「三音節の星」、三連の「三つ目」がそれである。三という数字は多くのものを象徴するが、トマスに関連していえば、父と子と聖霊、三位一体の神、生と死と再生の輪廻、二極に働きかける統一のダイナミックな平行状態などが考えられる。では、三芒の星とは何か。エメリイの説によれば、トマスはある意図を持った自分の詩をキリスト教の文脈にあてはめて書いている。従って、筋書道りに解釈すれば Three-Personed God と考えられる。芸術家の多くはベツレヘムの星を、光輝く十字架（四芒星）に描くが、何故トマスはダビデの星（六芒星）を二等分した三芒星を選んだのか、もしこの選択が偶然でないとするならば、考えられるトマスの意図は、三位一体論か、この世の創造活動の過程に働く三要素か、特別の意味は持たないがトマスが利用しうる強力な暗示的效果であろう、という。これを三位一体論ととる評者は他にもアニス・プラット³、デレク・スタンフォード⁴、W.Y.ティンダル⁵、E.ルイス⁶等沢山いる。中でもプラットはキリスト教的立場から見た三位一体の神のほか、ウェールズの古代宗教的立場にたつての三光(Three rays)を主張する。ウェールズのバード神学では光はロゴスと同義語であった。ウェールズの詩人であり、古代文物の研究家であった Iolo Morgannwg(1747-1826) は自分で発明したバードのシンボル/\\の意味を説明するため、次のように聖書ヨハネ伝を利用している。

In the beginning GOD

And GOD vocalizing his name said /\\ and with the word all the world sprang into being, singing in ecstasy of joy /\\ and repeating the name of the deity⁷.

つまり、三光は言葉であり、神の象徴である。三芒の星(three pointed star)はまたフロイド流に解釈され、男根のイメージから、ものの創造を暗示しているという理解もある。二行目の「空なる顔」(empty face)は五行目の「円空」(round of space)へと分裂していくイメージであり、「横切る光」を前出の星の分身と考えれば、「光の微笑」は神の微笑となる。R.M.キダー⁸はフロイド流に考え、「横切る光」は男性、「空なる顔」は女性を表すものとして両者合体による生命の創造が描かれている、とする。これに対してティンダルは起源の一瞬を想像する。次いで三行目の「骨の枝」とは何か。トマスの詩に骨のイメージは少なくなく、それらが象徴するところもまた多彩であるが、「骨の枝」から引き出されるイメージとして先ず思い浮かぶのは肋骨であり、アダムであり、それが表すものとしての創生であろう。ティンダルは知識の木に十字架、肋骨、男根のイメージをダブらせて考えている。キダーはこの行を創生の象徴とみる。尚、三、四の各行に繰返される「横切る」(across)について、ティンダルは創世記とゴルゴダ（誕生と死）を結びつけて考える。四行目の「原初の太陽」はトマスにあってはしばしば“sun”は“son”と結合し、神の息子であるイエ

ス、さらには父親との対比における若さ、青春を暗示する。キダーはこの語句“the first sun”を“the first son”、つまりアダムにとらえ、「活力となりし」「marrowed」と「叉状となりし」「forked」をトマスの性的イディオムの中で考え、その効果が「物質」(イブ)を生む。“marrow”も“fork”もトマスの好んで用いる語であるが、前者は、死の骨の内部の生命を暗示し、叉状は、多くの意味を有する。動詞としては、「刺す、投げる、分岐する」名詞としては「フォーク、木、川、道」形容詞“forked”としては「あいまいな、いかがわしい、多義性の、分岐を持つ」等の意味がある。ティンダルはこの行を、原始の太陽と息子、つまりイエスを生み出すために分裂する創造のメタファーとしてとらえている。ところで、これまでのイメージの展開としては、トマスの作詩法からして、自ら破壊の要素を持つ「三芒の光」という一つのイメージが「光の微笑」、「骨の枝」、「叉状の物質」へと対立、分裂を繰返し拡散することによって主題となるイメージの意味に接近しようとしているのである。五行目の「円空に燃上がりたる暗号」は二行目の「空なる顔を横切る光の微笑」のイメージと響きの対極として“smile”、“light”のライム、“face”、“space”のライムがうまく呼応しあっている。「円空に燃上がりたる暗号」は「空なる顔」のイメージの流れであり、ティンダルは十二宮を暗示していると指摘している。この指摘からは、宇宙の秩序、言葉、神などが連想されるが、さらに、十二という数は方位だけでなく、時間についても意味をもっていて、時間に関連していえば一年の月数を表し、十二時間ずつで昼夜を分かち、そして、対をなし、相反するものは果てしなく闘いつづけるというストア的な考え方をするなら、上下の関係ではない天国(昼)と地獄(夜)の渦巻くイメージが生まれる。J.コルグ⁹は言葉が生ずる前の、原初の火の中で混沌としている言葉の幻影を「暗号」の中にとらえ、そのイメージはやがて二連の「うっすらとした署名」で言葉の形を帯び、「水面の痕跡」に引継がれキリストの血によって残された「記号」となる。

3

第二連冒頭の、言葉の形を帯びた「署名」はティンダルによれば“creative Word”(神)のメタファーである。続く「三音節の星」は「三芒の星」の派流であるが、ここで興味深いことはトマスが言葉を解体したり、組立てたりする作業の中で「署名」が“sig-na-ture”と三音節に綴られることに気づき、それに星のイメージを加え「三音節の星」を創造したのではないかという推理である。ちなみに「音節」(syl-la-ble)そのものも三音節で成立している。三行目の「水面の痕跡」はティンダルによれば、ガリラヤ湖上のイエスの足跡を暗示し、キダーも同じ理解をしている。マタイによる福音書第一四章の出来事である。「痕跡」「imprint」をキダーは「刻印」として、水面上のイエスの「署名」と考えているが、これはまさしく一行目の「署名」の分裂したイメージである。尚、イメージの展開は「水面」と「月」の関係においてもみられる。月は古代より豊穡の女神として、水との関係が深く、月の女神の水浴姿が画題になるのもこの故である。月の上で鑄造された顔の「刻印」「stamp」は「痕跡」「imprint」のシノニムで、対立したイメージが再分裂して生まれたものである。キダーはこの月の顔の鑄造物に処女懐胎のイメージをダブらせる。中世のキリスト教徒にとってマリアは月の女神であった。彼等が子宝を祈願する時は月とマリアに祈ったのである。ここで思いだされることは、「水」、「月」、「鑄造物」のイメージを組合わせたジョン・ダンの詩、「別離の歌—落涙」である。

My teares before thy face, whilst I stay here,

For thy face coines them; and thy stampe they beare,
And by this Mintage they are something worth¹⁰,

大意：（男は妻でないかといわれる）その女性の顔を見て涙するが、それは彼女の顔が男の涙を銀貨のごとく鑄造するからであり、その涙一滴々に映る彼女の顔はまさしく刻印そのもの、おかげで（刻印されてはじめて通用する鑄貨のごとく）彼女の顔を刻んだ男の涙にある価値が生まれる、というのであるが「涙に映る痕跡」、「水面の痕跡」、「涙に鑄造されし女の顔の刻印」、「月に鑄造されし顔の刻印」と並べてくると、トマスの詩にはグンの匂いがする。五行目の「十字架と聖盤にふれたる血」はイエスが流した血であって、ティンダルによればキリストの受難の象徴であるという。例えば、トマスの詩「愛の摩擦にくすぐられたら」の中に「春の悪い血」がでてくるが、これには創世記で流されるアベルの血、青春の不純な血気、キリストの受難、復活祭と多くの意味がこめられている。同じようにこの行の場合も、キリストの蘇りをも含めた生と死のイメージが濃厚である。コルグはキリストの血を言語に結びつけ、血が生物学的に欠かせないものであるのと同様に言葉は靈的になくてはならないものだという。六行目にわたる「血の原初の雲にふれ」は血をキリストのメタファーとみるならばキリストの昇天であり、残された「記号」は前述の「署名」が分散したいくつかのイメージの一つであって、“Word”（神）と理解されるものである。最後に「血」、「記号」いずれも神（キリスト、言葉）のイメージをダブらせながら鮮やかな痕跡が天井に残されたが、やがてそこにキリストの降誕（復活、誕生、創造）のドラマが続演されるであろうことをわれわれは知っている。

4

第三連には、聖書的イメージと科学的、哲学的イメージが混在しているように思われる。D.ホルブルック¹¹は「初めに噴き上がれる炎あり」を、ホプキンズの詩行「…何百万の薪をくべ 自然のたいまつ燃えつづけ」と比較し、言葉の比喩においてホプキンズを賞でトマスを難じているが詩作上の優劣はさておき、炎の火花が「天候に燃え移る」点について、もしそうだとすれば天候はその際既に創造されていなければならない筈である、といって、その構成の非を指摘する。かつて、火について論じた哲学者の中で、ギリシャのヘラクレイトスは、宇宙は「つねにあった・そしてあり・あるであろう永遠から永遠にわたって存在するもの」と考え、この世の始源は天頂を満たす精気が燃焼する火であると想定した。（断片30）¹²そして、その火がある法則に従って消えて他の物質に転化するのである。その回路は、火－水蒸気－水－海－地となり、地から再び火に至る道程を辿る。思えば、トマス自身の天地創造の夢物語の知識の一つにこのようなギリシャ思想の理解もありえたのではないか。とすれば、火が天候に燃え移っても不思議ではない。火は消えてから天候（蒸気を含む）に転化するからである。三行目の「三つ目」は「三音節の星」の分身である。数字の三と目とを組合わせたイメージに（三角形の中央にある目）¹³というのがある。これは三位一体、神の万物照覧の目であり、トマスの「三つ目」もこの類縁と考えられる。続く「赤い目」のイメージはトマスの他の詩にも二度出てくる。その一つは18篇の詩に属する「去勢されたぼくらの夢」の中に使われているが、その「赤い目」は、吸血鬼ドラキュラを革命家とダブらせた赤のコミュニストを象徴し、いま一つ、25篇の詩の「光を育てよ」の中では「果樹園」の装飾語として、花盛りを表している。従って、トマスの「赤い目」には共通した、固定した意味はなく、文脈のなかで新しい意味が問われる。ホルブルックいわく。「赤い目」は、怒りや、酔いの視力を表す陳腐な表現であ

る。火花が目を持ちうるか？これをペニスにみなすとして果してそれが可能なのか？次いで、「花のごとくそっけなく」のシミリィは花が持つさまざまなシンボリズムを駆使しても“flower”と“blunt”の結付きが難しい、と。しかし、ホルブルックの不满にもかかわらず次のような推理は成立しないであろうか。ここでの「赤い目」は、「三つ目」と同格で神に繋がるものである。そして“blunt”は“flower”との関連において数ある意味の中から“simple”（つましい、無心の…）を選ぶとすれば、全体として女性のマリア像が浮かんでくる。マリアは前述の「水」のイメージに重なり、四行目の「うねる海」へと波及する。かくて、海を突破して誕生する「命」はイエス「神」である、と。西洋哲学の父タレスにいわしめれば、一切の事物の究極の「本性」は水であり、宇宙は生きていて内に魂を持ち、霊あるいは神で満ちているのである。そして、ここではその霊あるいは神の力の業が次の行で展開されることになる。第五ならびに第六行について、ホルブルックは、天然石油、塗油式、ケシ、秘油といった連想でもなければ、車の油の宣伝的意味をもっているわけでもない、ここはトマス自身の難解なシンボリズムに属する、特別な象徴的意味においてとらえるべきものである、と主張する。実は、トマスが初めて賞を獲得し、一躍有名になった詩に「緑の導火線により花咲かせる力」というのがあり、その詩がこの行のルーツではないかと思われるほど類似しているのである。「緑の導火線」は1933年の10月12日に作られ、同月29日「サンデー・レフリー」紙上に発表された。「初めに」が作られたのは1933年の9月で「緑の導火線」より少し早かったが、冒頭でものべたように改作されて、翌年発表されたのである。改作前の詩の二行は次の如くであった。

根は蒔き散らされし土地の中で爆発し
樹木があり、水があった¹⁴。

と、いうわけで、「緑の導火線」の方が「初めに」より先行していることがわかる。ここに「緑の導火線」の一部を載せる。

緑の導火線に花咲かせる力
わが緑の歳月を駆り 木々の根枯らす力
我を滅ぼす (第一連 1-3)

岩貫き 水流す力
わが赤き血を駆り 口達者な流れ干上がらす力
わが血をば蟻にかえる。 (第二連 1-3)

「緑の導火線」、(植物の茎)を通して生命の樹液を吸い上げ花を咲かせる力、その同じ力が人間にも働き、青春の覇気を養う。同時にその力が樹木の根を絶やし、人間の生命を奪う。いわば、自然も人間も同じ支配者の意思の下で生と死を繰返しているのである。そして、その、世に存在する全てのものの生と死の力の支配者がトマスの詩では極めてシンボリックに現れる。「神秘的な油」もその一つだと考えられる。

第四連になって初めてヨハネ福音書（1-1）の聖句がそのまま引用される。第一連の「星」第二連の「署名」第三連の「炎」と夫々に柱となるイメージを据え、そこから発せられた「暗号」、「三音節」、「記号」といった実体のない光の全てが集約されて生まれたのがトマスの「言葉」になっているように思われる。「言は神とともにあった。」という福音書の言葉は、トマスにあっては「堅固な光の基盤」がこれに代わる。堅固な光が神を指していることはいうまでもない。三行目の「空白の言葉」は前述の実体のない夫々の光を暗示しているものと理解できる。創世記1-2に“The earth was without form, and void”という言葉があるが、第三行を創世記になぞらえば“The word was without form, and void”ということになる。二行目の「光の基盤」は四行目に分裂して「息に曇れる土台」となる。その昔ギリシャ人は「息」あるいは「命」として魂を考えたといわれるが、トマスは「息」を霊と考え、ここで、実体のなかった言葉に霊を吹込み、「ことだま一言霊」を意識したのではないだろうか。そして、秩序なきものに秩序が、形なきものに形があたえられ流れ出てきた最初の文字が「生」と「死」であった。表音文字たる英語はアルファベットからなり、アルファベットのことを“Christcross-row”ともいう。「十字架（墓標）の列」とはまさしく「死」のイメージである。トマスの1934年の作品に「ひとたび薄明かりの錠がかからなくなった時に」があり、その中で詩人は次のごとくうたう。

Some dead undid their bushy jaws,
And bags of blood let out their flies;
He had by heart the Christ-cross-row of death.

死者の中には毛むくじゃらの顎を外し
血袋より蠅 解き放ち
死のアルファベットをば暗記せり（第四連-4-6）

この詩行はものを創造する媒体たる文字がいかに強烈に死のイメージを放っているかを物語っている。この連に対する評者の意見は様々である。スタンフォードは、ヨハネ福音書に対する詩人独自の解釈から、神抜きでヨハネ福音書と、詩人によって演じられる洗礼者の役割を示している、と考える。トマスの理解では、宇宙で意味を創造するのは言葉であり、その言葉の創造主は詩人である。トマスは「とりわけ十月の風が」のなかで、詩人がいかに「音節ごとに血を流し」自分自身の「言葉を出し」つくすか、そして、宇宙の形あるもの、ないもの、響くもの、響かないもの、あらゆるものに言葉の形を求めようとしているかをうたっている。次いで、コルグは、トマスの言葉への愛着が「響き」から始まったことから、詩人は明瞭に自然が発する音声を想像することができるのだ、という。キダーはトマスが、最初、天地創造が言葉によって啓発されたものであると考え、続けてよりシンボリックに天地創造を胎児の創造に結付け、さらに、その誕生した命が死と共存していることをうたっている、と説く。また、R.スティーヴンズ¹⁵は人間的なものと宇宙的なもの、人間性と神性が一つに合体したところに「初め」があり、創造する行為がある¹⁶、と考えた。

最後の連、第一行の The secret “brain” は改作前は The secret “thought” であった。思うにトマスはこの連で神の力、知恵を象徴しようとしたのではないだろうか。そして詩作ノートにそのソースを求めたに違いない。やがて、詩人は1930年11月に創作した“Cool, on no cool” (未発表)¹⁷ではじまる詩の中に“You wish to stay my prison/Closed in your cell of secret thought”をみつけ、前述の語句が閃いたのだと考えられる。更にこの詩行が二行目の“The brain was celled and solded in the thought”のベイスになったのであろうことも容易に推察できる。そして、この場合、一般論として詩作ノートにおける生物学的用語たる「細胞」と「思想」との結付きよりも、改作後の「細胞」と「脳」との結合のほうがはるかに自然に思われる。ティンダルによるとこの連は「謎の脳」が現れる前に、細胞化され、ハンダづけされる。熱したハンダは物を融合させ、熱い黒色の瀝青の混沌とした世界を導き、そこから輝く太陽が姿を現す。やがて混沌は悪魔（瀝青）、キリスト（太陽）へと分かれていく、というのである。続いて「血噴きいで」て、言葉（神）の血と第三連の「赤い目」をつき動かす。暗から明（光）への展開は、あらゆる創造、つまり神の、父の、詩人の活動であり、「光の風」に散らされた血は、神ならば（世界）父ならば（子供）詩人ならば（詩）となる。次いで、コルグは四行目の「静脈の ふるいにかかりて揺れ動きし前」に言及し、未だ生物学的生命の活動が行われない人間が出現する前のこと、振りぎるの中のスパゲティの如く震動する血管は十字架上のイエスの像そのもののイメージである、といい、最後の行“The ribbed original of love”に現れた「愛の肋骨の原型」はアダムであり、末尾の「愛」なる語は創造の初めに存在するものである、と。キダーは各行に散在する「頭脳」「細胞」「血管」「血」が組織されて作られた人間が肋骨のある愛の原型で終わるというイメージは産物、つまり「原型」としての「胎児」を意味し、胎児とアダムの結付きを示している、という。ここで付言するなら、神は土のちりで人（アダム）を造り、更に、人を眠らせそのあばら骨の一つを取って一人の女を造った。従って、あばら骨を取られる前のアダムは雄雌同性“androgynous”であった。アダムは神の命により、すべての生き物に名を与えた。神が土のちりから造った人に命の息を鼻から吹き入れ、生き物にしたと同様に、アダムは名のなかった生物（混沌）に名（秩序）を与えた、いわば言葉の創始者であったともいえる。いま一つ、ティンダルが悪魔の世界を連想した「瀝青」は、分岐した“pitch-fork”つまり、「長熊手」が三叉の鉾“trident”の変形として理解されたからであり、多くの象徴を伴う中での代表的なものが「悪魔」¹⁸であり、さらに「生命の木」、「男根」といった創造性を表す。ここで穿った見方をすれば、第一連の「三芒の星」、第二連の「三音節の星」、第三連の「三つ目」のそれぞれ分裂した類縁のイメージが「思想に結ばれ」て「瀝青の 太陽に向いて分岐する」という言葉に集約されたと考えられないであろうか。

むすび

トマスはかつて彼の「詩的宣言」の中で、詩人が最良の詩を書くということは、潜在意識の混沌としたイメージの塊から詩人の想像力を最大に啓発してくれるイメージを選択することであるという意味のことを述べている。幼い時から言葉に恋し、言葉の虜になった詩人は言葉の魔術師となっており、「言葉の中で、言葉のために働きたい」と願った。そして、詩人が作る一篇の詩は宇宙の姿と意義を変え、新しい世界の創造に寄与するのだという自負があった。また、クリスチャンではなかったが聖書文化の洗礼を受けて育ったトマスには彼独特の聖書理解があった。トマスにとってイエ

スは神（Word）を読み、神を理解し、神を正しく認識し、神の意味を仲間に説明してやることを生涯の使命にした批評家に過ぎなかった。それ故彼は、1933年8月29日の詩作ノートの余白に「イエスは一人の人間として生まれてくるべきではなく、あらゆる場所に生まれるべきである。」と、記したのである。ところで、偶然というべきか、たまたま入手した新約聖書外典の一つである詩人と同名のトマス福音書¹⁹の中に、天国は万人の内にあり、己を知る努力をすれば誰でも天国を見出し、自分が父なる神の子であり、神の国にあることを知ることができるのだということが説かれている。トマスはこの外典を読んでいたかもしれない。神の子は一人でなくてもよいのである。トマス自身も神の子になれるのである。神が天地創造を言葉によって為遂げたとすれば、神の子、実はトマスも言葉（詩）によって天地を創造できないことはない。言葉の中に生きようとしたトマスにとって、「初めに言があった。言は神と共にあった。」というヨハネの福音書はまさに格好の詩の主題であった。かくしてこの詩には各連を彩る様々なイメージの流れがあるが、その流れを掻集めると、詩うたい流れる一本の大河となり、河岸に響き渡るそのうたは、神によるコスモス創造の物語、つまり「詩人による詩創造の讃歌」なのである。

注

- 1 Dylan Thomas, *Collected Poems:1934-1952* (London: J.M.Dent & Sons Ltd., 1966), p.20.
- 2 Clark Emery, *The world of Dylan Thomas* (Florida: University of Miami Press, 1962), p.p. 195-198.
- 3 Annis Pratt, *Dylan Thomas'Early Prose: A study in Creative Mythology* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1970), p.p.85-90.
- 4 Derek Stanford, *Dylan Thomas* (London: Neville Spearman Limited, 1954), p.p.50-51.
- 5 William Work Tindall, *A Reader's Guide to Dylan Thomas* (New York: Farrar, Straus & Giroux Inc., 1981), p.p.59-62.
- 6 *Dylan Thomas: The Legend and the Poet*, edited by E.W.Tedlock (London: William Heineman Ltd., 1976), p.168.
- 7 Goro Ihara, *A Study of Dylan Thomas* (Gumma: A Library of Kantohgakuen University, 1988), p.183.
- 8 R.M.Kidder, *Dylan Thomas: The Country of the Spirit* (New Jersey: Princeton University Press, 1973), p.p.118-120.
- 9 Jacob Korg, *Dylan Thomas* (New York: Twayne Publishers, 1992), p.p.33-61.
- 10 *The Complete Poetry and Selected Prose of Jhon Donn*, edited by Charles M.Coffin (Toronto: Random House Inc., 1952), p.30.
- 11 David Holbrook, *Dylan Thomas The Code of Night* (London: The Athlone Press University of London, 1972), p.20.
- 12 岩野 秀明「時間論のプロブレマティック」1992年 世界書院 p.91.
- 13 *Dictionary of Symbols and Imagery*, edited by S.Yamashita (Tokyo: Taishukan, 1994), p.223.
- 14 *Dylan Thomas The Notebook Poem 1930-1934*, edited by Ralph Maud (London: J.M.Dent & Sons Ltd., 1989), p.94.
- 15 *Dylan Thomas New Critical Essays*, edited by Walford Davies (London: J.M.Dent & Sons Ltd., 1972), p.21.

- 16 トマスは H. トリースの批評にたいする反論の中で、相争うイメージで「瞬間的平和」を生み出すことができれば、その詩は成功である、といているが、人間性と神性が一つに合体したところに「瞬間的平和」が生まれることが考えられる。
- 17 *The Notebook Poems* 1930-1934, p.51.
- 18 *Dictionary of Symbols and Imagery*, p.499.
- 19 田川 建三他 「聖書の世界 第五巻 新約 I」1990年 講談社 p.275.